台湾総督府の衛生政策と地域社会
――ペスト・マラリア対策を中心として

栗原　純

はじめに

19 世紀末、「文明」と「野蛮」との二項対立において植民地支配が正当化された時期、福沢が執筆に関わる『時事新報』の社説が、日清戦争を「文明」と「野蛮」、すなわち「文野」の戦争と表現したことはよく知られている。「文明」とは何か、あるいは「野蛮」とは何か、その具体的事例として、「野蛮」清国の領土である台湾について、「文明」日本側史料が特筆大書したことに衛生状態がある。台湾に最初に上陸した日本軍である近衛師団の記録は、

> 彼地一般人民ハ衛生ノ何タルカヲ知ラス殆ント生命ヨリ金銭ヲ貴キニ置キ市中ハ糞便ヲ散乱シテ豚ヲシテ掃食セシメ家屋ノ建築ハ主ニ敵襲ノ防備ヲ専ラトシ採光通気ノ二法ハ全ク皆無汚水ハ各自ノ庭前ニ溢流シ犬雞豚等殆ント同居室内ハ暗黒ニシテ雞豚ノ糞便其臭ヲ満シ穿井アルモ汚水ノ滲入ヲ防カス[1]

と記し、統治者の視点から「野蛮」の実態、すなわち台湾を表象するものとして衛生状態を取り上げている。

事実、陸軍医務局長石黒忠悳によれば、

> 明治二十九年四月ヨリ同年九月マテ六ヶ月ニ於ケル患者総数ハ一万二百三十六人死者総数ハ三百二十二人内戦死傷及自殺合計八十二人ヲ扣除シ全ク病死シタル者二百四十人之ヲ試ニ内地衛戍兵ニ於ケル五ヶ年平均統計ニ比較スルニ患者ノ数ハ凡ソ三倍死者ノ数ハ凡ソ四倍ノ多キニ達セリ[2]

とあり、この実状は総督府にとって看過できる事態ではなかった。

このような史料から、台湾を不潔、非衛生として「野蛮」と断じ、この台湾を「文明化」する重要な施策として衛生政策が認識されたことは容易に理解できるであろう。総督府民政部警察本署衛生課長高木友枝は、明治 43 年、

1　『近衛師団軍医部征台衛生彙報』巻頭言には明治 29 年 5 月とある、11 ～ 12 頁。
2　『台湾ヲ巡視シ戍兵ノ衛生ニ付キ意見』（1896 年）1 頁。